ラオスの不発弾から工業生産と世界の未来を考える

中村 祐哉

現在の勤務校等
広島県熊野町立熊野第一小学校

在外での勤務校／帰国年月
上海日本人学校虹橋校／ 2014 年帰国

小５社会科「工業生産に関する単元」と小６社会科「国際協力に関する単元」二つの単元を、「ラオスの不発弾」を教材として連携させ、批判的に考える力と未来像を予測して計画を立てる力の育成を目的とした２年間にわたるプログラム。話し合いの場は、教員も驚くほど活発なものになった。さらに、既習事項である SDGs とも関連させて、未来の世界の姿とそこにかかわる自分について考えた。

実践・活動の内容

本実践は、小５社会科「わたしたちの生活と工業生産」と小６社会科「世界の未来と日本の役割」の２つの単元を通して、批判的に考える力と未来像を予測して計画を立てる力を育てることを目的としている。

1. 小５社会科　「わたしたちの生活と工業生産」

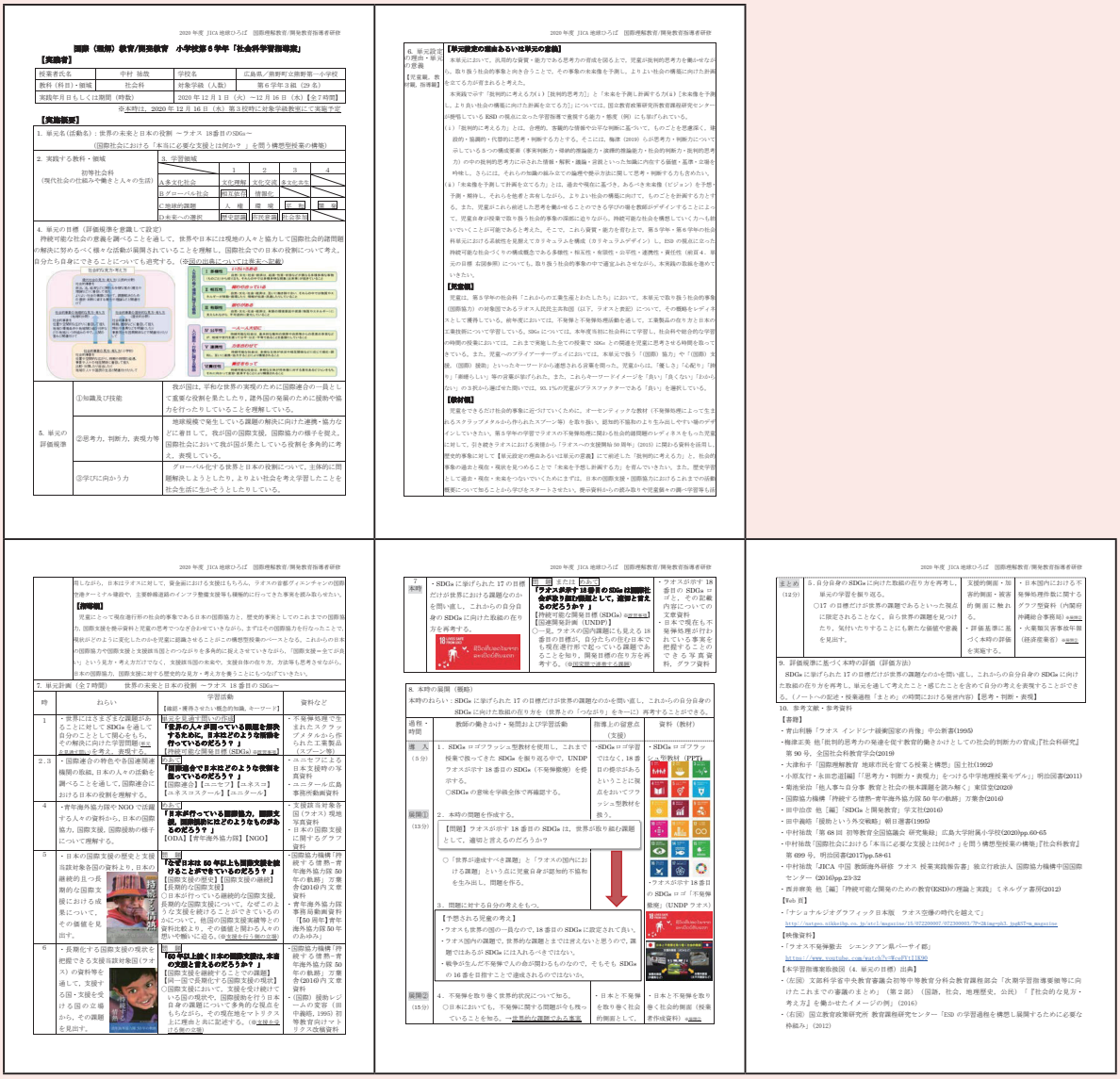
身近な工業製品調べからはじめて、日本の工業技術力と、技術立国である日本という概念をつかんだ児童に対し、ラオスの不発弾から生まれたスプーンの実物教材を提示。命を奪う工業製品である爆弾が、日本の工業技術によってスプーンになり、食事、つまり命を支える工業製品に生まれ変わっていることを学んだ。児童は、それまで人の生活を豊かにするものとして学んできた工業製品のなかに、爆弾という人を幸せにしないものがあることを知る。さらにそれらの形と役割を変えていくことに重要な役割を果たすのが工業技術力であると落とし込んだ。児童は「戦争と平和について考えた」「スプーンも爆弾も工業製品」「不発弾を生まれ変わらせた工業技術はとても大切」などの感想をもった。

2. 小６社会科　「世界の未来と日本の役割」

小５でラオスの不発弾についてすでに学んでいる児童を対象に実施した。日本の国際支援について学び、その中で特にラオスへのインフラ支援などの ODA 実績を提示しながら「日本がこれからすべき本当に必要な国際支援とは何か」について考えていった。児童からは最初は「日本が支援をするのは嬉しい」「世界への恩返し」など、「支援をしてあげる」立場から支援は良いことであるという意見が出たが、支援が 50 年以上続いていることを資料から読み取った後は、日本とラオス双方の立場から、長期間にわたって行われている継続的な支援のあり方を批判的な視点から捉える感想も見られるように

なった。次に、歴史的な経緯を踏まえて現在の支援の課題を考えた。支援が他国への依存を生んでいる現状や経済的自立への道筋を示せていないなどの課題を検討し、未来の国際支援がどのようにあるべきかを話し合った。

さらにこのカリキュラムの最終時には、既習の SDGs に関連付けて、ラオスが「18番目の SDGs」として示している不発弾処理問題を取り上げた。不発弾処理はラオスの国内問題なのか、世界的に取り組むべき問題なのかについて話し合い、最終的には SDGs に掲げられた 17 項目だけが世界の課題であるわけでなく、さらに 2030 年のゴール以降が重要であるという結論を得た。



国際（理解）教育／開発教育　学習指導案
（出典：2020 年度 JICA 地球ひろば 国際理解教育／開発教育指導者研修）

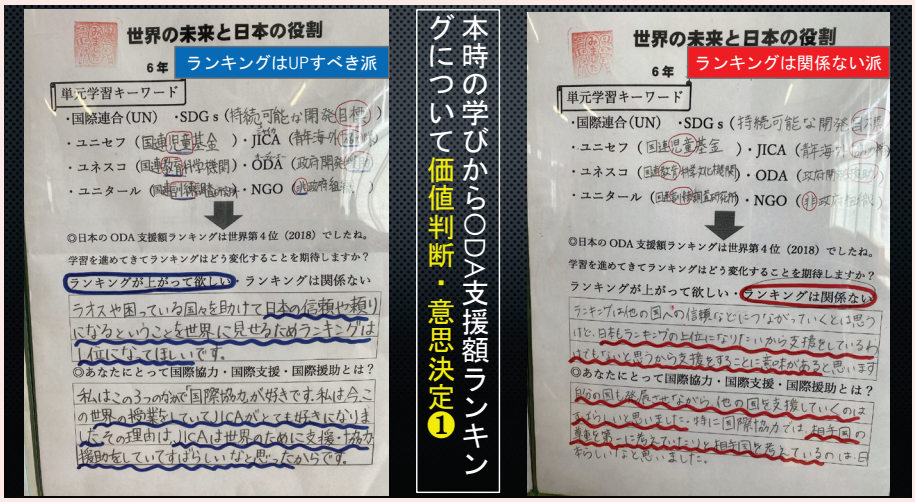
中村 祐哉

評価と課題

本実践は、ESD 教育の一環としての側面ももつ。児童は、この二つの単元の学びを通じて、ESD 教育で重視される①批判的に考える力、②未来像を予測して計画を立てる力、③多面的・総合的に考える力を養い、④つながりを尊重する態度で授業に取り組むことができた。

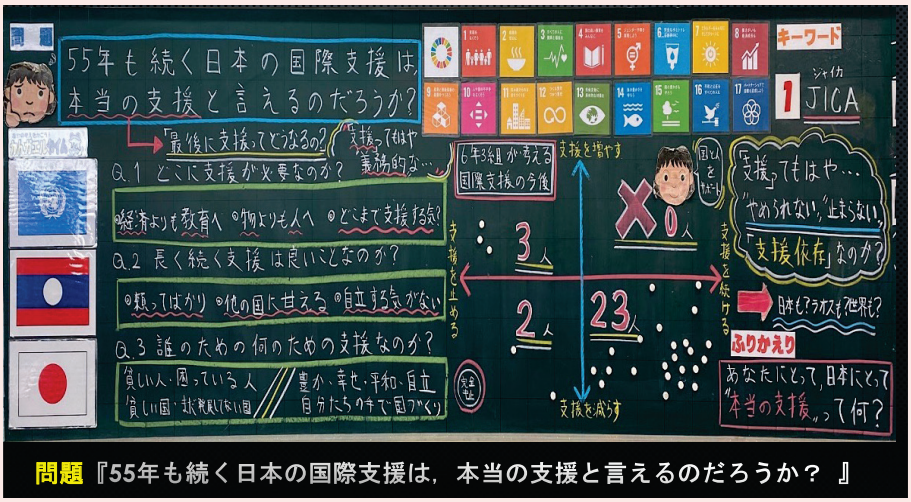
また、すでに 1 年間学んできた SDGs と組み合わせたことによって、2030 年という自分たちが大人になっている時代の世界について考えることができた。

毎年実施しているが、その年の児童実態に即しながら、少しずつアレンジしている。児童の反応はとてもよく、積極的に話し合いに参加する姿が見られた。特に（2）において ODA 支援額ランキングについて話し合った際は、「日本のランキングはアップすべき・上がってほしい」と「ランキングは関係ない」でクラスが 14 名対 15 名と真っ二つに割れ、それぞれが根拠を示しながら、活発な議論が行われた。



授業時で使用したワークシート

さらに、「55 年も続く日本の国際支援は本当の支援と言えるのだろうか？」についての話し合いでは、支援が最初から国家予算に組み入れられている現状から支援依存の問題や、誰のための支援なのかといった本質的な内容に発展した。児童の発言が相次ぎ、この場において私がしたことは、「国際支援の今後」として「支援を増やす・減らす」×「支援を止める・続ける」の分布図を作成した程度であり、「教師の出番はない」と感じるほどだった。教室の様子を見ながら、大きな手ごたえを感じた。



授業時の板書

中村 祐哉

一方で、批判もある。小５の産業学習である工業生産と、小６の公民的分野である国際協力は、本来初等教育の教科教育社会科の中においては直接的に関連付けることが少ない単元同士であるが、それを本社会的事象一例にフォーカスして紡いだ実践である。「これは社会科ではなく、総合的な学習の時間で取り組むほうが良いのではないか」と、教科の枠を超えて展開されているという評価を受けたこともあった。

本授業は現在のところは私が継続して担当しており、内容を深めたり、対象を広げたりすることができているが、特定の教員しか実践できないということは継続性の点から望ましくないと感じている。今後は内容のブラッシュアップを進め、多くの教員が取り組めるようなプログラムにしていきたいと考えている。

私が扱った教材はラオスや不発弾だが、それにこだわる必要はない。大切なのは２年間で児童の社会的事象に対する思考がどう変容していくかである。私の提案する指導案の通りにすすめてもよいが、外枠だけを残して中身を差し替えてもよいと思うし、むしろ、差し替えをすることによって目の前の児童により即したものとなり、授業や単元での児童の学びの質は向上していくと思う。

本単元は、関連事例であればどんな事象や教材を取り扱っても類似した実践展開ができる。「国際」や「グローバル」にこだわって無理やり外国の事例を引いてくる必要もない。たとえば、地元名産の熊野筆をテーマに展開するなどグローカルな視点からも、この実践は展開可能だと考えている。

実践に至った経緯と提言

広島市の公立小学校に５年間勤務した後に、2012 年に上海日本人学校に赴任した。教員だった父がかつて在外校勤務を志していた話を聞いており、私自身も教員になったときから、いつかは日本人学校の教壇に立ちたいと思っていた。

上海日本人学校虹橋校は当時児童生徒 1,500 名の大規模校で、小５と小６をもちあがりで担任した。他自治体出身の先生方と協働することは大変刺激になり、学びへのモチベーションの高い子供たち、教育熱心な保護者と様々な取り組みができた。

当時は中国の大気汚染がひどく、世界的にもそれがクローズアップされていた時期だった。また上海市内でも、鳥インフルエンザが流行しはじめていた。

さらに、中国では反日感情が高まり、各地で反日デモが頻発していた。外出先では日本語を使わないように気を付けているという在留邦人も多く、生活には緊張感があった。日本人学校も外壁に落書きをされたり、物を投げ込まれたりした学校もあった。休校を余儀なくされることもあった。

しかし、学校の現地スタッフは警備を厳重にしたり、市内の現状を知らせてくれたりするなど大変よくしてくれた。周囲の人から心配する声をかけられることもあり、国同士の問題と、人間の心と心がつながることは全く別のものなのだと実感した。

2014 年に帰国後は、在外校勤務経験者として国際教育の授業をつくるにあたって、中国の経験にだけ基づくのではなく、もっと汎用性のあるものにしたいと考えた。そこで中国の記憶が新しいうちにほかの国も知って、共通点を探したいと考えて 2016 年 JICA 中国センター（広島県東広島市）の主催する国際教育・開発教育指導者研修（JICA 地球ひ

ろば主催）に参加した。教員のための１年間のプログラムで、ラオスをテーマに授業を作る研修を受けた。教材化する素材を獲得するための現地訪問で出会ったのが「工業製品としての不発弾」だった。

このJICA教師海外研修からのつながりで日本国際理解教育学会にも参加し、現在、日中韓三カ国共同ストーリーテリングプロジェクトにかかわっている。これは日本国際理解教育学会による中国と韓国との共同研究で、絵本「お姫様の特別な旅立ち」を使って各国で授業づくりをしている。私は小６の特別の教科 道徳で、何不自由ない暮らしを送っていたある姫が退屈に耐えられなくなり旅に出るというストーリーから、違いを乗り越えて多様性を尊重するということについて考える授業を展開した。いずれ各国から実践報告が届くのがとても楽しみだ。

これらの実践にも在外教育施設での経験が生きていると感じることが多い。授業をつくっているときに取り上げる素材に自分の経験を当てはめることがあるが、在外教育施設勤務経験によってその引き出しが多くなったように思う。

帰国後は、国際理解教育への意欲をもっているにもかかわらず、日本の現場とのギャップを少なからず感じた。その意味では、全国海外子女教育国際理解教育研究協議会（全海研）の中国ブロック大会での発表や、機関誌の発行などを通して日本人学校勤務経験のある人とつながることができたのはとてもよかった。同じように帰国した教員が別の学校で頑張っていると考えると、とても励みになった。

上海は、私にとっては大切なもう一つの「帰る場所」となった。その場所、その国との関係を紡ぐことは、これからの自分の人生を豊かにすることにもつながると思う。いつか再び、他の国に住んで、大切な場所をさらに増やしたいと思っている。

世界中にある日本人学校には、先生を待っている子供たちが必ずいる。そこで出会った教え子も、一生大切な存在になる。このかけがえのない経験は、世界中どこの日本人学校でもできることだと感じている。